自閉スペクトラム症児の受容性言語能力と指示理解

東　美緒

【序論】自閉スペクトラム症（ASD）児は言語能力に障害を抱えていることが多いが、ASD 児の表出言語（情報を提供するために用いる言語）に比べて、受容言語（注意を向けて理解する言語）に関する研究はあまり注目されていない。また、実際の受容言語能力には ASD 児のどのような特性が関連するのかについて、先行研究では充分には明らかにされていない。本研究では指示課題・呼名課題・要求課題を用いて、ASD 児が指示理解に用いるコミュニケーション手段と ASD 児が表現に用いるコミュニケーション手段を実験的に評価し、ASD 児の特性との関連を検討した（目的 1）。また、指示課題では音声のみの指示の他に、絵カードを用いた指示、指差しを用いた指示を実験的に提示し、指示の提示の仕方によって ASD 児の指示への反応がどのように異なるのかを検討した（目的 2）。

【方法】研究対象児は、ASD 児 13 名であった。ASD 児が指示理解に用いるコミュニケーション手段を評価するために指示課題、呼名課題を実施し、ASD 児が表現に用いるコミュニケーション手段を評価するために要求課題を実施した。指示課題では、音声のみ（音声条件）、絵カードと音声（絵カード条件）、指差しと音声（指差し条件）の 3 条件の指示の提示方法を設定した。児の行動は、指示の対象物を正しく選択できたか、実験者に物品を渡す動作を行ったかという 2 つの観点から分類し、保護者への質問紙調査などのアセスメントを通して得られた、受容言語能力、表出言語能力をはじめとする児の発達特性との関連を分析した。また、呼名課題では、自由遊び場面で児の名前を呼んだときの児の反応から通過・不通過に分類し、指示課題の結果との関連を分析した。要求課題では、おもちゃが入った袋を見せたときの児の行動を記録し、指示課題の結果との関連を分析した。

【結果・考察】アセスメントから得た ASD 児の発達特性の中で、指示課題の通過・不通過に影響したのは、受容言語能力と表出言語能力であった。受容言語能力は物品を指示者に渡す動作の有無に関連し、受容言語能力が高い児ほど渡す動作を行った。呼名課題を通過しなかった児は、通過した児よりも物品を指示者に渡す動作の生起回数が少なかったことからも、受容言語能力と渡す動作の有無の関連が示された。また、表出言語能力は指示した対象物の選択の正誤に関連し、表出言語能力が高い児ほど対象物を正しく選択した。要求課題で発話がみられた児は、発話がなかった児よりも指示した対象物を正しく選択した回数が多かったことからも、表出言語能力と対象物の選択の正誤の関連が示された。また、指示の提示方法を変えても、指示課題への通過のしやすさは変わらなかった。しかし、指差し条件では、他の条件に比べて対象物を正しく選択した児が多かった。また、音声条件、絵カード条件において対象物の選択の正誤に関連していた表出言語能力が、指差し条件での選択の正誤には関連していなかったことから、指差しは、表出言語能力が低い児であっても対象物の理解を促すと考えられた。一方、絵カード条件では、指差し条件に比べて物品を渡す動作を行った児が多かった。音声条件、指差し条件において渡す動作の有無に関連していた受容言語能力が、絵カード条件での渡す動作の有無には関連していなかったことから、絵カードは受容言語能力が低い児であっても渡す動作を誘発すると考えられた。以上より、ASD 児に指示する対象を正しく理解させるためには音声を伴う指差しが、ASD 児の注意を喚起し物のやりとりを誘発するためには音声を伴う絵カード提示が有効であることが示された。（比較発達心理学）